

高齢者の子の性別構成と家族観

Elderly People's Views of Family in Relation to Children's
Sex and Household Structure.

平賀明子
Akiko Hiraga

ABSTRACT

The purpose of this paper is to investigate the relationship between the residential distribution of elderly people's children, based on sex and household construction, and elderly people's view of family. An interview survey was conducted among 227 elderly people living in Sapporo, ranging from 60 to 80 years old. The interviewees were divided into three categories: those with both sons and daughters, those with only daughters, and those with only sons. The survey results are as follows:

- 1) More elderly people lived with their married sons than lived with married daughters. Among these, living with the eldest son was the most case.
- 2) Of those who lived together with married children, more elderly people lived near their daughters than lived near their sons. Among these, living near the eldest daughter was the most common.
- 3) Elderly couples who lived separately from their children had a blanced view of their sons and daughters, unrelated to their children's sex, while elderly people living in other household structure regarded their sons as superior to daughters

Key Words: structure of children's sex, family view, elderly

要 約

本稿の目的は、世帯構成に基づく子どもの居住分布状況と家族観との関連を明らかにすることである。調査は札幌在住の60歳以上80歳の高齢者227名を分析対象に行われた。子どものサンプルは、息子と娘、娘のみ、息子のみの3つに分類されている。結果は以下のとおりである。1) 子ども夫婦と同居世帯では、同居では娘よりも息子が多く、その息子は長男が多い。2) 子ども夫婦の同居世帯では、近くに住むのは娘が多く、その娘は長女が多い。3) 家族観では、夫婦のみ世帯は子どもの性別の組合せにかかわらず、バランスのとれた家族観であったが、他の世帯では娘よりも息子を重要視する家

族観をもっていた。

キーワード：子の性別構成、家族観、高齢者、

1. 問題の所在

少子化にともなって発生する子どもの性別構成の偏りは、一人っ子や娘だけしかもたない高齢者の存在を増やしている。そのことはこれまでの伝統的な既婚の子ども（多くは長男）との同居によって満たされると考えられてきた高齢者の欲求構造（森岡、1997）に変化を余儀なくさせられると思われる。森岡は高齢者の欲求を経済欲求、身体欲求、関係欲求、価値欲求の4つに概念整理をし、居住形態の機能的側面と逆機能的側面を明らかにした。我が国の既婚子との同居率が欧米諸国に比べて高いのは、同居による機能的側面である経済の安定や身辺介護、子どもや孫との情緒的關係を逆機能的側面である高齢者の独立心やプライバシーの観念、義理の子どもとの葛藤回避よりも重要視する高齢者側の認識によるとの説明を行っている。しかし、こうした高齢者の同居志向は先に述べた子ども数の減少や性別的偏りなどによって選択を狭められるのに加え、子ども世代の別居志向の増加や扶養意識の変化によってこれまでの扶養のあり方に変更を迫っている。そこで考えられることは、欧米型の逆機能的側面の重視、すなわち、近居による親子関係への移行である。特に娘との近居は親側にとって、同居ほどではないにせよ介護援助や情緒的接触を可能にし、娘側にとっては直系制家族において排除されてきた財産継承の拡大や存在の重要性を強調できる機会ともなりえる。この点から本稿では、娘との関係が息子との関係のあり方に類似してくるといふ予測をたて、高齢者の欲求構造の変化の可能性をさぐることを目的とする。

2. 先行研究の検討と本研究の目的・方法

これまで多くの家族研究者によって、老親と子どもとの扶養のあり方に関するすぐれた研究が行われてきた（那須・湯沢、1970；長津、1987；三谷、1988；高橋博子、1990；布施晶子、1992；森岡、1993）。そこで第一に、扶養に関わる親と子の同別居形態は親側の職業階層によって異なることが明らかにされている（長津、1987；布施晶子、1992）。しかし、対象になっている子どもの性別が直系家族制を前提としているために、跡継ぎ・非跡継ぎの息子だけに焦点があてられ、世帯構成別にした娘の同別居形態が扱われていない。また、階層的に上層に属する人ほど、経済的な自立や良好な健康状態を理由に最初は別居をし、後に同居という途中同居を示唆しているが、はたして、10分以内の「近居」に住む娘が親の身辺介護が必要になったからといって同居へ移行するのだろうか。疑問である。

第二に、既婚の子どもとの居住形態は都市と郡部で異なる点が指摘されている（宮島、1992；布施晶子、1992）。しかし、子どもの性別構成をパターン別にした同居数や近居数、あるいは世帯の型による子どもたちの同居数や近居数が扱われていない。高齢者の単独世帯や夫婦のみ世帯の増加傾向は、既婚の子どもとの途中同居を前提とした扶養のあり方をさぐるだけでなく、近居による扶養のあり方も射程に入れて考察する必要があると思われる。

第三に、既婚の子どもとの同居は年齢階層によって異なることが明らかにされている（那須・湯沢、1970；宮島、1992；平成8年度「厚生白書」, p66）。しかし、1975年を境に高齢者の死亡場所は施設外から施設内へ移っている。このことは何を意味するのだろうか。おそらく自

宅で介護を受けたいという高齢者側の欲求とは裏腹に、家族の在宅における介護機能が弱まった結果、老人病院や老人施設で終末期を迎える人が増えていると考えられる。

このように、我が国の子どもとの同居による扶養は主に、長男とその家族による「経済的、情緒的、身体的扶養」として捉えられた。しかし一方で、娘との近居による居住形態は欧米独自のものではないという視点から、高齢者と既婚子との世代間関係を扱い、都市家族の二世代夫婦同居の研究も行われてきた（三谷、1978；1988b）。本稿ではこの流れから息子のみではなく、娘との居住形態も視野に入れ、高齢者自身による経済的自立性が高くなっていること（総務庁平成9年度；ニッセイ基礎研究所、1997）、および身体欲求は自宅介護のみではなく、近居による介護援助も可能なこと（仁木、1990）などを考慮に入れ、高齢者の欲求構造の残る2つの欲求である関係欲求と価値欲求は、息子との関係のみではなく娘との関係においても充足できることから、高齢化社会における娘との関係の重要性は息子との関係の重要性に近似してくるという仮説をたてた。検討する内容は以下のとおりである。

1. 世帯の型別、子どもの性別構成による同居、非同居
2. 世帯の型別、子どもらの居住分布状況

3. 世帯の型別、子どもの性別構成からみた家族観

なお、本研究は、1994年7月から8月にかけて札幌市で行った「高齢者の社会的ネットワークに関する調査」から得られた分析結果をもとにしている。調査の対象者は、札幌市の中央区、豊平区、白石区より確率比例抽出法によって抽出された60歳以上80歳以下の男女で、調査はすべて直接面接法を用い、抽出した405人にうち、回収された有効票は255票であり、回収率は63.0%である。分析に用いた対象者は全体の255名のうち、子どものいない夫婦のみ世帯15ケース、単独世帯11ケース、その他2ケース、計28ケースを除いた227名となっており、平均子ども数は2.2人である。

3. 結果

(1) 世帯の型別、子どもの性別構成による同居、非同居

表-1に示すように全体からみていくと、単独世帯15.0%、夫婦のみ世帯42.7%、無配偶子と同居16.3%、子ども夫婦と同居17.2%、その他8.8%となっている（表-1）。ニッセイ基礎研究所（ニッセイ基礎研究所、1994. p277）が行った同様の調査結果⁽¹⁾と比較してみると、札幌市の高齢者は単独世帯および夫婦のみ世帯が多く、子ども夫婦と同居が少ないことが特徴的

表-1 世帯の型別、子どもの性別構成による同居・非同居

() は%

世帯の型 子どもの性別	子ども夫婦と同居		無配偶子と同居		夫婦のみ世帯		単独世帯		その他世帯		計
	同	居	同	居	非同居	非同居	非同居	非同居	同居	非同居	
息子と娘	22		20		47		19		8	4	120
娘のみ	9		8		24		6		1	3	51
息子のみ	8		9		26		9		2	2	56
計	39(17.2)		37(16.3)		97(42.7)		34(15.0)		11(4.8)		227(100.0)

注1：その他世帯の同居は母子世帯の息子のみ1、娘のみ1、息子と娘は7、親との同居の息子のみ1、息子と娘は1となっている。

注2：子なし28ケースの内容は、単独世帯11、夫婦のみ世帯15、その他2である。

である。

(2) 世帯の型別、子どもらの居住分布状況
 つぎに対象者の子ども側に焦点をあて、世帯の型に子ども夫婦と同居世帯、夫婦のみ世帯、単独世帯と3世帯に限定し、子ども数に関わらず、どこに子どもが住んでいるかをみるために子どもの性別構成ごとに分布状況をみている(表-2)。世帯を3つに限定した理由は、無配偶子と同居世帯は子どもの結婚による移動など不確定要素が多いこと、その他世帯は異なった観点から議論をする必要があると考えたために除いたことによる。まず、子ども夫婦と同居を全体からみてみると、同居39.4%、交通機関をつかって30分程度24.2%、その他17.1%、歩いて10分程度13.1%、市内・近郊6.0%となっており、同居の占める割合がもっとも多い。夫婦のみ世帯では、その他がもっとも多い43.2%、車で30分が21.4%、市内近郊が21.1%、歩いて10分の近居がもっとも少ない11.3%となっている。単独世帯の居住分布の順位は夫婦のみ世帯と同じく、その他がもっとも多い49.5%、車で30分が19.3%、市内近郊が16.1%、歩いて10分が15.0%となっているが、その他と歩いて10分が夫婦のみ世帯よりも多い比率を示している。ど

ちらの世帯も子ども夫婦と同居世帯と異なる点は、子ども夫婦と同居世帯では同居が全体のなかでもっとも比率が高いのに対し、他の2つの世帯ではその他の占める比率が高いことである。これらの結果をより詳細にみるために、本研究では子どもの性別構成を息子と娘、娘のみ、息子のみの3つに区分してそれぞれの居住分布状況を調べた。その結果、子ども夫婦と同居世帯では、同居39ケースのうち、息子と娘の組み合わせが22ケース、娘のみが9ケース、息子のみが8ケースとなっており、息子と娘の組み合わせがもっとも多い。また、歩いて10分をみると、息子と娘の組み合わせが12ケース、娘のみが1ケースである。車で30分では、息子と娘の組み合わせが12ケース、娘のみが7ケース、息子のみが5ケースとなっている。同居、歩いて10分、車で30分に限定して明らかになった点は、娘のみと息子のみでは大きな違いがみられなかったのに対し、息子と娘の組み合わせでは同居が息子に多く、歩いて10分および車で30分では娘が多かったことである。また、同居の息子のうち長男の占める比率が多く、近居では長女が占める比率が高いという結果は、われわれの先行研究によって明らかにされている。⁽²⁾

つぎに、夫婦のみ世帯をみてみると、歩いて10

表-2 世帯の型別、子どもらの居住分布状況

()は%

世帯 子の 性別	子ども夫婦と同居世帯						夫婦のみ世帯					単独世帯				
	同居	10分	30分	市内 近郊	その 他	計	10分	30分	市内 近郊	その 他	計	10分	30分	市内 近郊	その 他	計
息子 と娘	20	3	2		4	29 (29.3)	6	17	9	27	59 (27.7)	4	6	5	17	32 (34.4)
娘 のみ	2	9	10	2	4	27 (27.2)	9	15	15	29	68 (31.9)	5	5	5	12	27 (29.0)
息子の のみ	9	1	7	2	7	26 (26.3)	4	6	13	17	40 (18.8)	5	3	2	6	16 (17.2)
計	8		5	2	2	17 (17.2)	5	14	8	19	46 (21.6)		4	3	11	18 (19.3)
計	39 39.4	13 13.1	24 24.2	6 6.1	17 17.2	99 100.0	24 11.3	52 24.4	45 21.1	92 43.2	213 100.0	14 15.0	18 19.3	15 16.1	46 49.5	93 100.0

高齢者の子の性別構成と家族観

分では、息子と娘の組み合わせが15ケース、娘のみが4ケース、息子のみが5ケースとなっており、車で30分では、息子と娘の組み合わせが32ケース、娘のみが6ケース、息子のみが14ケースである。この2つの居住分布に限り、車で30分の息子のみ14ケースが特に多かった以外は、子どもの性別による差異はみられない。単独世帯のこれら2つの居住分布をみみると、歩いて10分では、息子と娘の組み合わせが9ケース、娘のみが5ケースであり、車で30分では、息子と娘の組み合わせが11ケース、娘のみが3ケース、息子のみが4ケースであり、歩いて10分の娘のみ5ケースが多いほかは、子どもの性別による違いはみられなかった。このことから、夫婦のみ世帯と単独世帯は子どもの性別による居住分布に大きな差異はみられないが、子ども夫婦と同居世帯は同居は息子に多く、近居は娘が多いというように子ども側の役割分担が顕著であった。

(3) 世帯の型別子どもの性別構成からみた家族観

表-3は家族観のそれぞれの質問項目と平均を示している(表-3)。質問の方法は、1の全く反対から5の全く賛成の5択式を用い、質問項目a「遠くの親戚より近くの他人」を便宜上、近い他人志向に、質問項目b「家族といえども、

それぞれの生き方に干渉してはいけない」を個人化志向に、質問項目c「結婚した子はもはや家族ではない」を結婚独立志向とした。また子どもの性別構成を息子と娘の組み合わせ、娘のみ、息子のみの3通りに分け、世帯の型別に示した。まず、近い他人志向からみると、息子と娘の組み合わせでは世帯の型にかかわらず平均に近く、娘のみでは子ども夫婦と同居世帯は平均よりも反対と答え、逆に単独世帯では賛成と答える比率が高い。また、息子のみでは世帯の型にかかわらず反対と答えている。つぎに個人化志向をみると、夫婦のみ世帯だけが子どもの性別構成にかかわらず、平均にもっとも近く、子ども夫婦との同居世帯では息子と娘の組み合わせが突出して賛成と答えているが、娘のみと息子のみは平均に近い。しかし、単独世帯は子どもの性別構成によってバラツキがみられ、息子と娘の組み合わせと息子のみが平均よりも高く、娘のみは平均よりも低い比率を示していた。

5. 考察

子どもの性別構成を世帯の型別にみた結果、夫婦のみ世帯が最も多かった。それに子ども夫婦と同居世帯、単独世帯が続いている。子どもの性別構成では世帯類型にかかわらず息子と娘の組み合わせがもっとも多く、娘のみあるいは

表-3 世帯の型別、子どもの性別構成からみた家族観

質問項目	子どもの性別構成	子ども夫婦と同居世帯	夫婦のみ世帯	単独世帯
a. 近い他人志向： 「遠くの親戚よりも近くの他人」である	息子と娘	4.24	4.21	4.16
	娘のみ	3.87	3.83	4
b. 個人化志向： 家族といえども、それぞれの生き方に干渉してはいけない	息子のみ	3.88	4.23	4.44
	息子と娘	4.76	4.17	4.57
	娘のみ	4.12	4.12	4.83
	息子のみ	4.11	4.23	4.11

注：近い他人志向の平均は4.11(分散0.96)、個人化志向の平均は4.22(分散1.02)結婚独立志向の平均は1.79(分散1.19)である。

息子のみはほぼ同数であった。調査時点での対象者年齢が60歳から80歳までであったことを考慮に入れると、札幌市在住の高齢者のみの世帯(夫婦のみ世帯と単独世帯)は厚生白書(厚生省、平成8年度)が示す数値より多いといえそうである。それはまた、子ども夫婦と同居世帯の減少を示唆するものだが、別居の子どもがどこに住むかは高齢の親にとって気になることである。そこで、子どもの居住分布状況から明らかになったことは、世帯の型によって差異がみられたことである。本稿では子ども夫婦と同居世帯、夫婦のみ世帯、単独世帯の3つの世帯に焦点を絞り、子どもの性別構成ごとにみている。その結果、子どもが娘のみおよび息子のみなど同性のみである場合は、同居数に違いがみられないが、息子と娘という異性の組み合わせの場合では、息子の方が圧倒的に同居するケースが多い。この点からみると、我が国の伝統的な直系家族は同居に関していまだその影響を残しているといえそうである。近居については世帯の型によって異なった分布状況がみられた。すなわち、子ども夫婦と同居世帯にのみ娘優位の現象がみられ、夫婦のみ世帯および単独世帯の近居では性別によって大きな違いがみられない。近居を歩いて10分、交通機関を使って30分、市内・近郊までを含めると、札幌市の高齢者は先の厚生白書が示す「別居している子どもの約半数は一時間未満の近居となっている」という数値を裏付けている。

子どもの減少はかつてのような子どものなかの最年長としての役割に変化を促すことになるのだろうか、それともならないのだろうか。本稿での関心はこうした子どもの減少に伴う長男役割、長女役割を子どものきょうだい数と住居場所から考察を行った。その結果、子ども数、あるいは子どもの性別構成によって若干の違いがみられた。すなわち、子ども夫婦と同居世帯では、子ども数、子どもの性別に関わらず同居

が長男優位、近居は長女優位であった。しかし、夫婦のみ世帯では歩いて10分、交通機関を使って30分を近居と位置づけた場合、息子と娘の性別構成では長男・長女がほぼ同数で7割を占めていたのに対し、娘のみと息子のみでは娘のみが8割、息子のみは5割で娘のみの近居の方が多かった。単独世帯の息子と娘の性別構成による近居では、夫婦のみ世帯と同様、長男・長女が7割を占めていたが、娘のみと息子のみでは娘のみが4割、息子のみは5割とわずかに息子のみのが多かった。

家族観に関しては夫婦のみ世帯だけが2つの質問項目すべてにおいてもっとも平均に近い家族観をもっていた。すなわち、家族といえども、ほどほどの距離を保ちながら、親密な付き合いをする高齢者が多いといえそうである。先の三谷の指摘にもあるように、自営業は最初から長男優位の伝統的な同居形態をとる傾向があるのに対し、夫婦のみ世帯は給与所得者の多いことが予想され、たとえ現時点で遠くに子どもがいても親の加齢を考慮して同居へ移行する途中同居や一時同居など、居住をめぐる多様な親子選択があることが考えられる。それに対し、子ども夫婦と同居世帯および単独世帯はどちらかといえば息子優位な家族観をもつ傾向にあった。なかでも単独世帯の子どもを他人に近い見方をする背景には、親子のあいだですでに居住をめぐる選択肢があらかじめ決められているか、あるいは高齢者自身が一人暮らしを最初から選択していることが予想される。

6. 本稿のまとめと今後の課題

札幌市における高齢者の世帯の型別に子どもの性別構成による同居・非同居、子どもの居住分布の状況、さらに子ども数を入れた居住と長男・長女が占める割合、家族観の考察を行った。その結果は以下の4点にまとめることができる。

- (a) 子ども夫婦と同居世帯では子どもの性別

構成にかかわらず、同居は娘よりも息子の方が多くみられた。

- (b) 近居では世帯の型によって違いがみられた。すなわち、子ども夫婦と同居世帯は息子よりも娘に近居が多く、夫婦のみ世帯と単独世帯では性別による差はみられない。
- (c) 子どものきょうだい数と近居、および長男・長女の占める割合では、子ども夫婦と同居世帯は子ども数、子どもの性別にかかわらず同居は長男優位、近居は長女優位であった。

しかし、夫婦のみ世帯と単独世帯はともに息子と娘の性別構成については長男・長女がほぼ同数の7割を占めていたが、娘のみと息子のみは夫婦のみ世帯は長女が、単独世帯は長男がやや優位であった。

- (d) 家族観では夫婦のみ世帯が子どもの性別構成にかかわらずもっとも平均に近く、夫婦のみ世帯と単独世帯は性別によって差異がみられた。すなわち、娘よりは息子に対して家族一体感をもつ傾向がある。

今後の課題としては、高齢者の加齢を考慮した、既婚の子どもとの同居および近居の経済的、身体的、情緒的な関係過程を研究課題としたい。この点に関して家族経済学者である宮島(宮島、1992)は、リトワクの修正拡大家族論は2つの点で注目に値すると述べている。そのひとつは、福祉機能における家族と官僚機構との比較優位論であり、他のひとつは、資源としての親族ネットワークの交換理論である。この場合の親族ネットワークの交換とは、親から子へは遺産・贈与、子から親へは福祉サービス・援助はをさし、家族を資源として評価する経済行為に動機づけられた利己主義に基づく交換を意味している。我が国の子ども夫婦との同居率の高さは、欧米に比べれば減少傾向にあるとはいえ、多いといえる。その同居を支えてきた根底には、親子間の経済的依存関係があると宮島は指摘す

る。平均寿命が延びは、厚生白書が示すように成人した子と親の関係の長期化を意味する。それはまた、息子夫婦との同居であれば、義理の嫁との関係が長期になることであり、娘夫婦との同居であれば、義理の息子との関係が長期になることを意味する。もし親と子がよい関係を継続したいと考えるなら、欧米の親子関係のような“スプーの冷めない距離”へ親子双方が選択することは自然のことともいえる。宮島は現代の家族に適応的とされる修正拡大家族は、さまざまな家族病理を生み出す「負の資源」として機能し得ると主張する。たとえば、高齢者の例であれば、拡大家族(直系制家族)を理想とする親と核家族を理想とする子どもとの居住選択をめぐる意見の相違や、老いに伴う親の長期化した介護をだれが担うべきかをめぐって家族成員間に発生する紛争や葛藤、ストレスなどがある。こうした問題はこれまで家族社会学や老年学の領域で検討されてきたが、21世紀の超高齢化に直面する今、経済学の分野でも家族を内部資源の対象に含めて対応していく可能性が高い。家族を研究する者として、今後、これらの内部資源を交換理論の視点から研究することが課題である。

注

- (1) ニッセイ基礎研究所が行った「図表6-9 子どものパターン別、家族構成(親世代)」によると、単独世帯は6.7%、夫婦のみ世帯は32.0%、無配偶子との同居は21.8%、子ども夫婦との同居は36.4%、その他が3.1%である(p277)。
- (2) われわれの調査結果を示した「札幌市における老親の子どもとの距離と接触頻度」(平賀・三谷、1998)では、同居は長男が、近居は長女の占める比率が高かった。

付記

- (1) 本研究は北海道高齢者問題研究協会「都市高齢者の社会的サポートネットワークに関する研究」(代表:三谷鉄夫 元北海道大学教授)の一部として行われた。この研究の代表であり、指導教官でもあった三谷鉄夫先生、北海道情報大学の加藤喜久子先生にはいろいろと教えていただいた。心から感謝の意を示したい。
- (2) 本稿は第8回日本家族社会学会(於:奈良大学)での自由報告「高齢者の子の性別構成と家族観」に加筆・修正したものである。

文献

- Antonucci, T. C. .1990, "Social Support and Social Relationship." in Bristock, R. H. and George, L. K (eds.), Handbook of Aging and Social Science, Academic Press, 205-226.
- 老川寛, 1976, 「他別居子との関係」, 上子武次・増田光吉『三世代家族』坪内出版 235-264.
- 武石恵美子, 1994 「ポスト「孝行社会」の親子—老いた親を誰が扶養するのか」『日本の家族はどう変わったか』ニッセイ基礎研究所, NHK出版 237-286.
- 那須宗一・湯沢雍彦共編, 1970『老人扶養の研究 老人家族の社会学』坪内出版, 3-52.
- 那須宗一・上子武次共編, 1980『家族病理の社会学』培風館, 123-134.
- 三谷鉄夫, 1978, 「高齢者世帯の構造に関する一考察」『家族研究年報』第4号, 173-191.
- 三谷鉄夫, 1988, 「都市家族の世代間関係」『北海道大学文学部紀要』1-21.
- 三谷鉄夫, 1991, 「都市における親子同・別居と親族関係の日本の特質」『家族社会学研究』第3号p41-49.
- 平賀明子・三谷鉄夫, 1998, 「札幌市における老親の子どもとの距離と接触頻度」『都市学研究』35, 1-6.
- 布施晶子・清水民子・橋本宏子編, 1988『老人と家族』青木書店, 3-156.
- 布施晶子・玉水俊哲・庄司洋子, 1992『現代家族のルネサンス』青木書店, 194-217.
- 宮島 洋著, 1992, 『高齢化時代の社会経済学』岩波書店, 62-124.
- 望月嵩・目黒依子・石原邦雄編, リーディングス日本の社会学『4 現代家族』東京大学出版, 15-122.
- 森岡清美著, 1993, 『現代家族変動論』ミネルヴァ書房, 163-189.
- 森岡清美・望月 嵩共著, 1997, 『新しい家族社会学』四訂版, 136-147.
- 利谷信義・大藤修・清水浩昭編, 『老いの比較家族史』三省堂, 229-285.
- 湯沢雍彦著, 1991, 『老人と子ども家族との関係』財団法人 安田生命社会事業団 101-132.
- 厚生省編, 1996, 『平成8年度版 厚生白書』, 株式会社ぎょうせい, 60-77.
- 総務庁編, 1997, 『高齢社会白書』, 大蔵省印刷局, 52-84.